

日本労働年鑑 特集版 太平洋戦争下の労働運動

The Labour Year Book of Japan special ed.

第六編 朝鮮民族独立運動

第二章 抗日武装闘争の開始

日本帝国主義は朝鮮民族独立運動に対する弾圧を一段と強化し、都市、農村をとわず、山間僻地にいたるあらゆる地域に軍隊・憲兵・警察隊を網の目のように張りめぐらし、それでも直接的な弾圧の手がとどかないところには手先やスパイを布置するなど、一連の弾圧機構を各地に設置するとともに、他方においては地域巡回講演・映画・婦人会・母姉会を組織し、白衣着用風習にかえて色染服着用を奨励するなど、思想面から朝鮮人の生活風習や民族意識まで抹殺させようとした。こうして一九二〇年代から三〇年代の初期にかけて急速に高揚した民族解放労働・農民運動を、武力と思想の両面からことごとく弾圧した。

このような悪条件に直面した朝鮮の共産主義者たちは、民族独立運動を地域的な労働農民闘争ではなく、日帝の武力弾圧に対しては武装闘争をしなければならなくなり、抗日武装闘争に適した「満洲」にその根拠地を設置することになった。当時「満洲」は日帝支配下にあったが、広大な地域だけに支配体制は弱く、ことに東満一帯はその住民の八割が朝鮮人で、その大多数が朝鮮内で民族独立運動に参加したが、日帝の弾圧強化によってよぎなく亡命せざるをえなかった愛国闘士や、植民地統治のもとで苛酷な搾取と収奪によって土地や生活手段を奪われて移住した貧農が約八〇万人もいた。これらの地域は、中国人の軍閥や地主による二重三重の搾取と抑圧のもとで、以前から民族主義者が指導した独立軍の抗日義兵の闘争地であり、中国人の抗日部隊もさかんに闘争をくりひろげていた。さらに、これらの陰阻な山岳地帯には原始林が生い茂って朝鮮の北部山脈と連なり、ソ連とも国境を接しているため、地形的にも武装闘争に適していた。

この地において、朝鮮労働党の組織者であり指導者である金日成を先頭とする朝鮮の共産主義者たちは、抗日武装闘争をおこなう遊撃隊組織と広範な人民大衆の愛国的な力とを密接に結合させながら抗日武装闘争に立ち上がった。金日成の指導のもとに一九三二年のはじめ、朝鮮の進歩的労働者・農民および愛国的青年たちが結集し、最初の遊撃隊が「満洲」安図県で結成された。これにひきつづき三二年の春には汪清・延吉・和竜・琿春などの各県でも遊撃隊が結成された。かれらはマルクス・レーニン主義思想で武装し、反帝・反封建民族解放闘争と社会革命闘争を密接に結合させ、それを基盤に革命闘争へ人民大衆を結集する組織者であり、革命軍であった。武装闘争に不可欠な問題は隊員の武装であった。優秀な装備をした日本軍と戦うのは困難であり、武器も日本軍・警察隊・偽満軍から鹵獲して武装しなければならず、最初は鎌矢・棍棒などで敵の武器を奪う命がけの危険な闘争をくりひろげ、銃一挺奪うために命を捧げた人たちも少なくなく、「全ての武器は血でもって奪い、生命と替えた。われわれが持っているどの銃一挺、劔一本にも同志たちの高貴な血が浸っていないのはなかった」(「抗日パルチザン参加者たちの戦闘回想記」一ページ)。このような勇敢な戦いによって武装を整えていった。

(注)「装備は如前共匪において最も高く昭和十年末において約一人に一挺の長銃又は拳銃、三人に一個の爆弾、一八〇人に一挺の軽機を所持している……実包は射撃優秀

なるも平均二〇〇発、其他普通射手には一〇〇発………」と記録されているが、これは日本側のすくなく見積った数字であろう（『満洲共産匪の研究』第一輯（軍政部顧問部）一八三ページ）。

日本労働年鑑 特集版 太平洋戦争下の労働運動

発行 1965年10月30日

編著 法政大学大原社会問題研究所

発行所 労働旬報社

2000年2月22日公開開始

■ ←前のページ 日本労働年鑑 特集版 太平洋戦争下の労働運動【目次】 次のページ → ■
日本労働年鑑【総合案内】

法政大学大原社会問題研究所(<http://oisr.org>)
